# 新潟・砂山中道下遺跡（すなやまなかみちした）

1　所在地　新潟県北蒲原郡加治川村大字湖南字砂山中道下

2　調査期間　一九九八年（平10）五月～八月

3　発掘機関　新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

4　調査担当者　鈴木俊成

5　遺跡の種類　集落跡

6　遺跡の年代　平安時代、中世、近世

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

新潟平野の北部を流れる加治川と胎内川に挟まれた低地には、近世まで塩津潟（旧紫雲寺潟）が存在したが、砂山中道下遺跡はこの南側の潟端に位置する。標高は四m前後である。発掘調査は、日本海沿岸東北自動車道建設の土運搬用道路建設に伴うもので、長さ二八八m幅約九mの約二五九〇m²を対象として実施した。

（中　条）

調査範囲内には、南から北に流れる四本の自然流路（河川跡）が存在し、この四本の自然流路に挟まれた自然堤防の微高地に遺構は分布している。この自然流路は塩津潟（旧紫雲寺潟）の中心部に向かって流れ込んでいたと考えられる。検出した遺構は、中世と考えられる掘立柱建物三棟と、柱穴と考えられるピット約一〇〇基、素掘井戸二基と板材や曲物を敷設した井戸三基、箸状木製品や板材などの木製品が多量に出土した土坑五基、溝状遺構一〇条以上と、近・現代の土坑約二〇基などがある。また調査区の中央を通る幅約四〇mの自然流路の西側周辺では、炭化した藁や微細な焼骨混じりの炭化物の広がりと、焼骨・炭化物とともに漆器椀が出土した小土坑（墓?）が検出されている。なお、調査範囲が道路幅約九mと大変狭いために、遺跡の全容は不明である。

遺物は、土器・石製品・木製品・銭貨などが出土しているが、中でも木製品の出土量が多い。土器は平安時代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼・青白磁・土師質土器、近世の肥前陶磁器などがあり、その中でも中世（一四・一五世紀）の土器が多く、平安時代や近世のものは少ない。石製品は砥石が数点出土している。木製品は漆器皿・漆器椀・曲物・下駄・鍬身・扇子・将棋駒・箸状木製品などと、呪符・塔婆が出土している。

呪符・塔婆は、八点出土している。周辺から出土している遺物か

ら中世の所産であると考えられる。(1)～(4)は中央の自然流路から、(5)～(7)は包含層から、(8)は木製品が多量に出土した土坑から出土している。特に(1)(3)(4)は中央の自然流路から出土しており、西側周辺で検出した小土坑（墓？）との関連性が考えられる。

## 8　木簡の釈文・内容

### 自然流路

(1)　「（符籙）急々如律令布」　266×32×3.5　051

(2)　□（符籙カ）急々如□（律カ）令　□」　(206)×22×3　051

(3)　「〈・𑖨南无大日如来」　322×34×6　033

(4)　□（𑖨カ）南无□（☆カ）□　(317)×27×3　051

### 包含層

(5)　□急々如律□（令カ）　(86)×(29)×(5)　081

(6)　□天□形□（星カ）急々如□（律カ）×□□（天カ）　(105)×(32)×(4)　081

(7)　□（符籙カ）□　(98)×41×2　019

(8)　・銀将」　・□（金カ）」　(22)×25×9　061

### 土坑

(9)　「□□□□（天カ）□□□□□□□南□（无カ）大日如来□（忌カ）□□□」　219×38×3.5　051

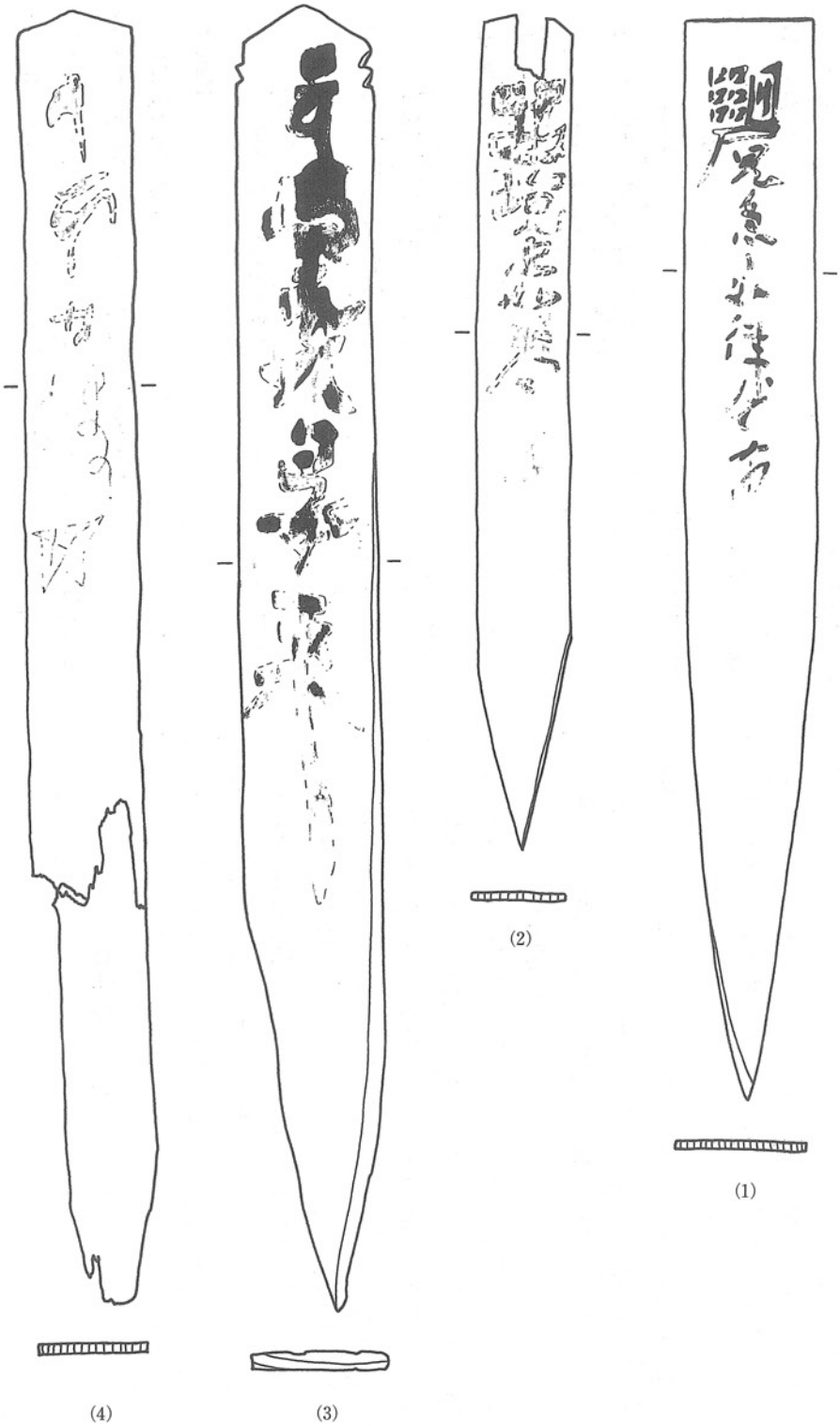
(1)は完形である。上端を平坦に切り、下端を尖らせている、表面の文字は肉眼でもほぼ判読可能である。

(2)は上端は圭頭状で一部欠損し、下端を尖らせている。墨書は一文字目が明瞭ではないが符籙と考えられ、「鬼」らしき文字が見える。「律」も薄れて明瞭ではないが、前後の文意から判断した。また、その下に間を置いて墨痕が見られるが、薄く不明瞭である。

(3)は完形である。上端を圭頭状に削り、上端の両側面から二段の切り込みを入れている。下端を尖らせ、裏面にも墨痕らしきものが見られるが、不明瞭である。

(4)は二つに折れており、下部は乾燥により変形・収縮している。上端を圭頭状に削り、下端を尖らせている。一文字目は大日如来を意味する梵字が記され、その下の「南无」までは判読できるが、その下は不明瞭である。

(5)は左側面に切断面があるのみで、その他はすべて欠損している。「令」はひとやねまで認められる。また、上部と右側に墨痕が見られる。


(1)
(2)
(3)
(4)

(9)

(7)

(6)

(5)

(6)は上下両端、および両側面が全て欠損している。また、(5)と(6)は確認調査で同一の試掘トレンチから出土し、板の状態や筆跡が似ていることから、同一個体の可能性がある。

(7)は下部を欠損する。墨痕が部分的にしか残っていないため不明瞭であるが、残存する墨痕から符籙ではないかと考えられる。(8)は将棋の駒。

(9)は完形である。上端を平坦に切り、下端を尖らせている。また、裏面下部は一部炭化している。全体に墨痕が薄く、「南无大日如来」の両脇と下にも文字が見られるが不明瞭である。（石田守之）